

このように全体は中国と日本の時代順ではあるが、医書と  
 医人をキーワードに中国の医学と医療文化が日本でいかに受  
 容・保存され、また発展してきたかが有機的に語られている。  
 その一つ一つが氏独自の研究蓄積と広範な識見に裏打ちされ  
 ているので、ツボを得た贅肉のない記述ばかり。また最新の  
 氏以外の研究成果も幅広く紹介され、水を漏らすところもな  
 い。七〇をこす本書の図版もそうで、簡単にお目にかかれな  
 いものばかりである。

とはいっても、本書はあくまで概説書ないし入門書だろう。  
 それゆえ人名・書名索引や参考文献の詳細をあえて付けな  
 かったものと拝察している。「あとがき」に述べられるように、  
 研究利用には氏の先行書『中国医学古典と日本』、今回本書と  
 同時に刊行された『日本漢方典籍辞典』、また近い将来刊行予  
 定の『宋元明医籍考(仮題)』を見なければならぬ。しかし  
 いずれも通読するタイプではないので、それらエッセンスを  
 まとめた本書は現日本の漢方医学史研究レベルを鳥瞰する絶  
 好の書として、広く会員諸氏にご推薦申し上げたい。

(真柳 誠)

〔大修館書店〕〒102-1846 東京都千代田区神田錦町三  
 一・二四、電話〇三―三二九五―六三三、平成十一年六月一日、  
 B6判、一七八頁、本体価格一、六〇〇円〕

小曾戸 洋 著

### 『日本漢方典籍辞典』

漢方の臨床書にしろ医史学書にしろ、読んでいて知らない  
 書物の名に出くわした時、あるいは知っていても正確なこ  
 がわからなかった時、ちょっと取り出してすぐに調べること  
 ができる辞典があれば、どれほど便利であろう。  
 そのような希望の書がついに出現した。

だれもがほしがっていたのに、なぜに今まで登場すること  
 がなかったのか。理由は簡単である。著者が跋で述べてい  
 る如く、この作業は、「千年をゆうに越す日本の漢方医籍の解題  
 をなべて一人で行うなど、およそ大それたこと」であるとい  
 うことに他ならない。にもかかわらず著書は、「誰かがやらね  
 ばならぬと意を決し」、この未開拓の分野にあえて挑んだ。そ  
 の言やよし。評者の筆者を深く尊敬する所以である。

本書の特徴は大凡次の点にある。  
 第一に、七百七書目という(平安時代から明治時代初期に  
 至るおよそ一千年にわたって書かれた)膨大な数の書物を紹  
 介していることである。

第二に、すべての書物について書影が付されている点で、  
 その数は九百点近くにのぼる。これによって読者は一瞬にし  
 てその書のイメージを頭の中に入れることができるであ  
 る。

第三に、書誌学的な知識が十分に盛り込まれている点で、

著者名、その書の性質、巻冊、伝本の記述により、その成立や出現に関する知識を誤りなく知ることができる。著者紹介の部分は、その著者の代表的著作の項に含まれており、簡明ながら充分な情報量である。

第四に、内容紹介が極めて客観的であることである。辞典においては編著者のスペキュレーションはなるべく避け、公正な記載が要求される。本書は必要にして最小限の知識を要領よくまとめ、この点でも見事である。

第五に、書名の読み方をかなで示し、かつ文中の人名と書名にルビを付してあることである。二通りも三通りも読める場合、どれが正しいのか迷うことが多い。本書で正確を期することのできるのがあるがたい。

第六に、各書の現在の復刻状況についての情報が記してあるため、入手可能であるかどうかがわかることである。また、稀覯本に関しては、所蔵している図書館名が記されており、どうしても読みたければなんとかなることも教えてくれる。

第七に、巻末に和刻漢籍医書出版年表が付されていることである。どの中国医書がいつ翻刻されているか、当時の出版事情を知る格好の資料となつていると同時に、その書の日本の医学界に対する影響力を想像することができるのも大きい。

たとえ臨牀的な論文を書くにしても、昔の文献を引用することは大いにあるが、この時にその文献に関する確実な情報

をその中に盛り込むのが、かなり大変な作業であるのは、一度でもやったことのある人ならよくおわかりであろう。年号を西暦に直すだけで時間をとられる。著者の生没年を調べるのは手間がかかる。序文の書かれた年と発行年が一致するとは限らないのでどちらを取るか考えねばならない。このような作業は、本論とは関係ないだけに、わからないといらだつ。本書の情報、その点での労力を大幅に省くことができる。

取り上げられた書物は全領域にわたり、各分野の重要な書物がほぼすべて網羅されているばかりでなく、これまであまり知られなかつた書物に関してもスポットをあてている。特に傑出しているのは、幕末の考証学者たちの著書を、その評価をも含めて紹介している点で、これらは世が世ならば当然上梓され、書誌学史上に燦然と輝く金字塔となつていたはずのものであることを考えると、ようやく正当な位置に復したという感を深くする。これは、著者自身が幕末考証学派の人々と同じ視点を持ち、研究分野も共通しているという深い共感からでていることはいままでもない。

ところで、この辞典にはもう一つの側面がある。それは、啓蒙書として最初から通読することによって、膨大な日本の医学書群の全体像を身につけることができるという点である。その場合は、時代別、著者別に分類した方が便利ではあるが、評者はそれを自分の頭の中で行い、読み進みながら日本の医学の歴史を書物によってたどるといふ密かな楽しみを

享受している。

本誌は、医史学研究専門の雑誌であり、この場でこの名著を紹介するのが最もふさわしいのはいうまでもない。しかし、実は本書は漢方の臨床家にとっても座右に置くべき好著であり、ぜひ手元で活用していただきたいという希望を、各家学説研究を専門とする評者は持っている。

(安井 廣迪)

〔大修館書店・〒一〇二一八四六六 東京都千代田区神田錦町三  
一―四、電話〇三―三二九五―六二二一、平成十一年六月一日、  
A5判、四六九頁、本体六、〇〇〇円〕

酒井 シヅ 編

### 『疫病の時代』

医学史を研究する吾々にとって、疫病の歴史は多くを学ぶ事の出来る好史料を提供してくれます。しかし数多い疫病すべてに精通することは無理なことです。その中で特に興味をもって長年月調べてきた疫病の二、三を、どなたもお持ちの事と思います。若し私に尋ねられたら、痘瘡と梅毒と新しくおこったエイズをあげるでしょう。それには諸々の関連した動機や思考があるからです。

昨年二月、酒井シヅ教授編になる『疫病の時代』なる好著が出版されました。実はもっと早く紹介文を書くべきところ、

私の怠慢により時期が経過した事をお詫びしなければなりません。

この書物は酒井教授の序文によると、「月刊言語」誌に一九七七年、「疫病と文明」というタイトルで、八人の執筆でリレー連載したが、終ってみれば疫病が人類にもたらした影響が浮き彫りになり、そのままで終るのも心のこりなので、新たに四人の方に別の角度から執筆して頂きそれを加えて『疫病の時代』と名づけて出版されたものです。

次に執筆者と題名を紹介します。

酒井 シヅ はじめに

村上陽一郎 ヨーロッパの黒死病

宗像 恒次 現代文明とエイズ

鈴木 隆雄 古代日本人の病

酒井 シヅ 近世社会とコレラ

深瀬 泰旦 天然痘 その流行と終焉

鈴木 則子 創造される病〈癩と性〉

立川 昭二 性病〈江戸のエロス〉

福田 真人 佳人と天才の病〈結核のロマン化〉

藤田 紘一郎 寄生虫と感染症〈病とその媒介生物の物語〉

養老 孟司 未来の感染症

小林 武夫 コラム「感染症と戦争」チフスのメアリ」物

語 昭和最大の食中毒事件」

これを見るとおわかりのように、執筆者はその疫病史に関して長い間の研究歴をもち、著書や論文も多く発表してお